

令和二年度 入学試験（令和元年11月16日）

「国語総合」

戸田中央看護専門学校

一、次の文章は、台湾に生まれ、三歳の時に家族と東京に引越し、台湾語混じりの中国語を話す両親のもとで育った作家のエッセイである。読んで、あとの設問に答えなさい。

わたしの祖母は、中国語で教育を受けたのではない。祖母が少女の頃の台湾では、日本語が「国語」だった。一九四五年、第二次世界大戦が終結するまで、台湾は日本の統治下にあった。日清戦争のちに下関条約にもとづいて台湾が日本に(ア)割譲されたのは、一八九五年。となると、祖母が生まれたのは、台湾が日本に割譲されて四半世紀以上経つ頃になる（ちなみにわたしの祖母は、父方母方ともに日本統治下の台湾に在住していた、いわゆる「本省人」である）。

母方の祖母は、わりと裕福な家庭に育ったという。曾祖父は、子どもたちを積極的に学校に行かせる方針だった。おかげで、誰もが——とりわけ女の子は——教育を受けられるという時代ではなかったのに、祖母は初等教育の上の家政学校まで通った。当時の台湾では、良妻賢母で(イ)ティッシュクな女性を育てることを目標とした学校がいくつも設立されていたという。

——あたしが子どもの頃、おばあちゃんはよく洋服をつくってくれた。とてもじょうずでみんなが羨ましかった。

母は、よく誇らしげに回想していた。わたしも、祖母がミシンを(ロ)巧みに操る姿をおぼろげながら(ニ)ギョクしている。祖母が家政学校で学んだのは、洋裁だけではない。日本語も、だ。

日本の台湾総督府は、学校教育をとおして台湾の子どもたちの日本にたいする(三)を育もうとしていた。日本語を教えることが、日本の思想や精神を教えることと密接に繋がっていたのだ。台湾では、昭和に入ると、国語教育をとおして日本統治下の台湾の子どもたちを「日本民族」「大和民族」化させる、いわゆる「皇民化運動」が盛んになってゆく。やがて日中戦争がはじまると、それはさらに激化する。祖母は、そのような状況のもとで日本語を学んだのである。わたしの曾祖父は、その世代の台湾人の多くがそうであったように、日本語ができなかったはずだ。彼らは、台湾語と呼ばれる福建省南部で話されていたコトバを話す。大陸から台湾海峡を渡って、ひとびとが台湾に移り住むようになったのは十七世紀。祖母の両親である曾祖父は、福建省南部から渡ってきたひとびとの子孫にあたる。曾祖父が、台湾を統治していた日本に対して何を思い、どう感じていたか今のわたしには想像がつかない。ただ、曾祖父が自分の子どもたちを宗主国である日本の学校に通わせたことだけは確かな事実である。祖母やきょうだいが、日本語を「国語」として学んだことがその証だ。あかし

戦時中、日本人になりなさい、日本人を目指しなさい、と教えられていた台湾人たちは、戦争が終わったとたん、日本から切り離された。(A)台湾人は、日本人になる必要がなくなった。いや、むしろ台湾人は日本人ではないと突きつけられることになった。

母が言っていた。子どもたちに聞かれない話をするときの祖母は、日本語で会話をしていた。知られたくない話もそうだが、こみいった話をするのにも、日本式の教育を受け、日本語を学んだ祖母にとっては、日本語をつかうほうが便利だったのだろう。(B)そんなふうに日本人ではなくなったあとも、日本語は祖父母の中に込みこんだままだったのだ。

……わたしは、祖母が宗主国のコトバとして学んだ日本語を、祖母の子どもである母たちは学ばなかったのに、祖母の孫である自分が「国語」として学んだという因縁を思う。

考えてみればとてもふしぎなことではあるけれど、子どもの頃のわたしは、日本在住の母よりも、台湾にいる祖母のほうがよほどじょうずな日本語を話すということについて、ほとんど疑問を感じたことがなかった。そういうもののだと受け入れていた。

ちょうどこんな季節だった。祖母が、台湾から日本にやってきた。妹の出産を控えた母に代わって家事をぜんぶとりしきり、四歳だったわたしの面倒をつきつきりで見てくれた。わたしは祖母にいつもまとわりつき、夜も祖母と同じ布団で眠りたがった。母が入院すると、祖母はわたしを連れて毎日見舞いに通った。病院からの帰り道、いつも同じメロディーが町に流れていた。小さなわたしの手を優しくゆすりながら、ゆうやけこやけでひがくれて、と祖母は歌った。予定日を数日過ぎてようやく赤ん坊が生まれると、もう四月が(3)セマ^①っていた。祖母は台湾に戻り、わたしは日本の幼稚園に通いだした。

あの春、中国語と台湾語で喋ることは(今よりも)じょうずだったけれど、日本語をわたしはまだ一言も知らなかった。祖母は中国語があまり得意ではないから、わたしたちは、主に台湾語で話していたはずだ。やがてわたしたちは、日本語で会話するようになっていく。日本統治時代の台湾で教育を受けた祖母と、日本で育ちつつある孫娘にとって、日本語は、中国語よりもずっと楽に使いこなせる言語だった。考えてみれば、わたしの祖母が母親になったばかりの頃、台湾における「国語」の座は、中国語が占めるようになっていた。そして、約半世紀にもわたってその座にあった日本語は、禁じられたコトバとなった。(C)子どもたちは学校に通うようになると新しい「国語」を叩きこまれるが、新しい言語を習得するには歳をとりすぎていた大人たちとなれば、そう簡単にはいかない。母が、いとおしそうに回想していた。

——おばあちゃんは、中国語がそんなにじょうずじゃない。真的(zhen de)を、ヂンデ、という。おばあちゃんの中国語、かわいい。

まるで他人事のような母の口ぶりに、わたしも妹も笑いをこらえきれない。

——あのね、ママの日本語もとてもかわいいよ。

母は想像しただろうか。自分の娘が、自分の母親と日本語で会話するようになることを。自分の娘に、ママなんかよりもおばあちゃんのほうが日本語がじょうずだ、と言われて傷つく日が来ることを。かつて、わたしは、母の日本語がゆるせなかった。何ていい加減なのだろうと苛立った。そんな母の日本語を、いつか(II)ようになるとはまったく思いもしなかった。

母とわたしの「国語」が異なるのは、ほかでもないわたしたち自身が、国境線をまたぐ移動をしたためである。そう、中国語が「国語」である台湾から、日本語が「国語」である日本へと、わたしたち一家は移り住んだ。

わたしは想像する。母が、叔父や叔母たちと一緒に、祖母のつたない中国語を可笑しがっているところを。今のわたしと妹が、母の日本語を面白がるようになる、とても楽しそうな光景として。けれども、(D)わたしが母を傷つけたように、母は祖母を傷つけたことがあるかもしれない。わたしは首を振る。(E)想像するだけで胸が締めつけられる。母とわたしがそうであったように、母もまた、自分の両親が教わったのではない言語を、学校で教わった。しかし、わたしの祖父は、国境線を越えるような移動をしていない。彼らはずっと、台湾にいた。支配者と「国語」の交代が、台湾人の頭上で行なわれたのである。だからわたしの祖母は、台湾語と日本語と中国語を、それぞれ少しずつ理解できる。ずっと台湾にいただけ。いや、ずっと台湾にいたので。

台湾の歴史や政治状況について知ろうと努めていた頃、祖母と日本語で話すことを(III)思うようになった。台湾の「国語」が、日本語であった過去も中国語である現在も、台湾人たちの多くが話し

続けてきたコトバ——台湾語で、祖母と話してみたいと思った。妹の二十歳の誕生日を台北で祝った年なので、わたしは二十四歳。台湾語で祖母と話そう。わたしはひそかに決意する。けれども祖母は、わたしたちの顔を見ると嬉しそうに日本語で(ニ) カンガイ してくれた。

——よく来たのねえ、さあ、お座りなさい、叔母ちゃんが果物を切るから、たくさん召し上がりなさいね……

祖母のなめらかで、たおやかな日本語をおしのけて、台湾語を喋ることがわたしにはとてもできなかった。わたしが神経質になろうとなるまいと、幼女から少女の時期にかけての祖母が、日本語というコトバとおして、(三) 眼前 に広がる世界を言語化し、学んでいったという事実は永遠に変わらない。当時の帝国・日本と植民地・台湾は(四) 不均衡 な関係にあった。けれども、今、自分の目の前で、日本語でわたしにむかって語り掛ける祖母はとても嬉しそうだ。わたしと日本語で話せることが嬉しそうなのだ。遠い昔、日本統治下で教わったコトバで自分を迎え入れる祖母の前で、わたしは立ち尽くす。(F) わたしは、祖母との間で自分に日本語を禁じることを諦めた。そして、祖母の日本語の(五) フトコロ の中に飛び込もうと開き直る覚悟を決める。

母が妹を産むのを待つ日々、まだ日本語を一言も知らなかったわたしに、ゆうやけこやけでひがくれて、と歌ってくれた祖母の声を覚えている。あの頃のわたしよりほんの少しだけ大きかった祖母たちに、夕焼け小焼けの歌を教えた日本人たちのことを思う。たとえ大人たちの中には支配者である日本に対して抵抗を感じる者がいたとしても、少女だった祖母は、学校の先生が教えてくれる日本語や日本文化を素直に学んだのだろう。いつか、先生たちの国が戦争に負けて、日本人がいなくなったあとの台湾で日本語が禁じられるようになるとは思ひもしなかったはずだ。祖母は、日本語ではなく中国語を「国語」として学んだ娘が日本に住むことになったとき、(G) どう思ったのだろう。日本で育つ孫娘が、自分の娘の話していた中国語ではなく、日本語を喋るようになったことを(H) どう感じていたのだろう。

(温又柔『台湾生まれ 日本語育ち』白水社 より 一部改)

問一、傍線部(あ)～(お)のカタカナを漢字に直しなさい。

【記述式解答】

- (あ) テイシュク (い) キオク (う) セマ(つて) (え) カンガイ
(お) フトコロ

問二、傍線部(ア)～(エ)の漢字の読みをひらがなで記しなさい。

【記述式解答】

- (ア) 割譲 (イ) 巧(み) (ウ) 眼前 (エ) 不均衡

問三、空欄□に入ることばとしてもっとも適当なものを、次の1～4から選びなさい。

【解答番号1】

- 1、探求心 2、競争心 3、愛国心 4、忠誠心

問四、傍線部（A）「台湾人は、日本人になる必要はなくなった。いや、むしろ、台湾人は日本人ではないと突きつけられることになった」とあるが、これはどのようなことを意味しているか。もっとも適当なものを、次の1～4から選びなさい。 【解答番号2】

- 1、日本による長期間の支配から解放された台湾人は、自由の意味をかみしめるとともに、本来の中国人としてのアイデンティティを取り戻した。
- 2、日本による日本民族化政策が盛んだったときも、その後、日本から切り離されて日本人でなくなることも、台湾人の意志とは無関係の突然の転換だった。
- 3、長期にわたって日本民族化させるための皇民化教育がなされたが、うわべの教育によって台湾人のアイデンティティが本来に変容したわけではなかった。
- 4、体制が突如として転換したときに、当時の台湾人がどう感じ、どう行動したかは、一言では語るができないほど多様であった。

問五、傍線部（B）「そんなふうには日本人ではなくなったあとも、日本語は祖父母の中に沁みこんだままだったのだ」とあるが、どういうことか。もっとも適当なものを、次の1～4から選びなさい。 【解答番号3】

- 1、言葉をその都度の相手によって使い分ける能力を身につけるには、年齢が高すぎた。
- 2、支配者が変わると同時に言語を切り替える者は不誠実だと見なされた。
- 3、基本的な感性と思考を枠づけた日本語は、大人になっても内面に残り続けた。
- 4、日本人として育ったために、支配体制の変った後も日本語を愛してやまなかった。

問六、傍線部（C）「子どもたちは学校に通うようになると新しい「国語」を叩きこまれる」とあるが、この場合の「国語」は何を指すか。もっとも適当なものを、次の1～4から選びなさい。 【解答番号4】

- 1、公用語
- 2、日本語
- 3、中国語
- 4、台湾語

問七、空欄 に入ることばとしてもっとも適当なものを、次の1～4から選びなさい。

【解答番号5】

- 1、愛おしむ
- 2、学ぶ
- 3、頼りにする
- 4、褒める

問八、傍線部（D）「私が母を傷つけたように」とあるが、この説明としてもっとも適当なものを、次の1～4から選びなさい。

【解答番号6】

- 1、わたしが台湾人である母が日本語を使うことに苛立ったように
- 2、わたしが故郷を捨てて日本に移住した母を許せなかったように
- 3、わたしが新しい言語環境への適応を拒む母を軽蔑したように
- 4、わたしが正しい日本語を使えない母にもどかしさと怒りを感じたように

問九、傍線部（E）「想像するだけで胸が締めつけられる」とあるが、この説明としてもっとも適当なものを、次の1～4から選びなさい。

【解答番号7】

- 1、母に無理解だったことを深く後悔しているわたしには、それと同じ関係が母と祖母の間にあったと想像するのは辛いことである。
- 2、わたしに対しては優しい母だが、その母がかつて誰かを傷つけてきたのなら、わたしにとってもつらいことである。
- 3、異郷で暮らす外国人のコトバが下手だからといって、それを嘲笑するのは残酷なことである。
- 4、「かわいい」という言葉は誤解されやすく、軽蔑したり嘲笑したりする意味を持つてしまう場合もある。

問十、空欄 に入ることばとしてもっとも適当なものを、次の1～4から選びなさい。

【解答番号8】

- 1、誇らしく
- 2、心地よく
- 3、面倒くさく
- 4、うしろめたく

問十一、傍線部（F）「わたしは、祖母との間で自分に日本語を禁じることを諦めた」とあるが、この理由としてもっとも適当なものを、次の1～4から選びなさい。

【解答番号9】

- 1、祖母は台湾語よりも日本語の方がうまかったから
- 2、祖母の日本語はわたしが学校で学んだ現代の日本語にはない気品があったから
- 3、祖母の日本語には、どのような歴史であれ、祖母の生きた時代の歴史が刻まれていたから
- 4、祖母は日本語を使うことによって日本に移住した母やわたしを許していたのだから

問十二、傍線部（G）「どう思ったのだろう」（H）「どう感じていたのだろう」とあるが、ここから読み取れる筆者の思いとしてもっとも適当なものを、次の1～4から選びなさい。

【解答番号10】

- 1、歴史が大きく転換した時代の中に生きていた個々人の生について思いめぐらすとともに、異なる時代を生きた他者の生をたやすく理解してしまうことについては慎重であろうとしている。
- 2、日本統治下の時代からすでに七〇年が過ぎており、祖母の世代の歴史経験はあまりに遠く、その思いを理解することは断念せざるをえないと考えている。
- 3、親しみと愛によって強く結びついている家族であっても、完全に理解することなどできないという点では他人と変わらないと考えている。
- 4、わたしにとって祖母と母との関係にはうかがい知れない部分があり、その真実を知ることについては躊躇せざるをえないと感じている。

二、次の文章を読んで、あとの設問に答えなさい。

この二つの構造は、哺乳類に限って見られるものである。へ a へ、哺乳類という名が示すような、哺乳という機能が成立するためには、唇と頬とは、欠くことができない構造なのである。それは、子どもが親の乳首に吸いつく、という行動を考えればわかるはずである。爬虫類では、唇も頬もなく、へ b へ「口は耳まで裂け」、口裂から歯がはつきり見える。哺乳類では、上下の唇を閉じると、歯は見えぬ。へ c へ、爬虫類では、唇がないから、唇の閉めようがない。この口で、乳首から乳を吸おうとしたら、どうなるか。母親の乳首をかみ切ってしまうのである。そうでなくても、爬虫類の口では、口裂から、乳がどんどん漏れてしまうことになる。へ d へ進化的すなわち系統発生的には、唇と頬とは、まさしく「哺乳」類の特徴である。

（養老孟司『からだを読む』ちくま新書 より）

空欄へ a へへ d へに入ることばとしてもっとも適当なものを、次の1～4からそれぞれ選びなさい。

- | | | | | | |
|-------|--------|--------|--------|---------|----------|
| へ a へ | 1、そして | 2、ゆえに | 3、たとえば | 4、だから | 【解答番号11】 |
| へ b へ | 1、なぜなら | 2、あるいは | 3、しかし | 4、したがって | 【解答番号12】 |
| へ c へ | 1、ただし | 2、すなわち | 3、ゆえに | 4、ところが | 【解答番号13】 |
| へ d へ | 1、ともあれ | 2、他方 | 3、だから | 4、むしろ | 【解答番号14】 |

三、次の空欄「 」に入る漢字としてもつとも適当なものを、1～4からそれぞれ選びなさい。

【解答番号15～19】

15 社長の座を虎視「 」々と狙っている。

1、端 2、眈 3、嘆 4、綻

16 「 」より育ちとはよく言ったものだ。

1、学 2、家 3、姓 4、氏

17 建前ではなく「 」を開いて本音で話し合いましよう。

1、胸 2、腹 3、襟 4、衣

18 取り付く「 」もない態度をとられてショックをうけた。

1、島 2、暇 3、隙 4、岩

19 あの人は何回も「 」場をくぐってきた強者だ。

1、火事 2、土壇 3、修羅 4、正念

四、次のことばの意味としてもつとも適当なものを、1～4からそれぞれ選びなさい。

【解答番号20～22】

20 拍車をかける

1、出来事が最盛期を迎える

2、事柄の成就に向けて力を添える

3、物事が脇道に逸れるのを防ぐ

4、時代の流れに便乗する

21 寓話

1、古くから伝えられたおとぎ話

2、ほとんどの国民が知っている歴史物語

3、教訓や風刺を含んだたとえ話

4、民衆の間に伝承されてきた昔ばなし

22 同根

1、親子のような関係

2、夫婦のような関係

3、君臣のような関係

4、兄弟のような関係

五、次の23・24の二つのことばの関係と同じ関係になる組み合わせとしてもっとも適当なものを、
1〜4からそれぞれ選びなさい。

【解答番号23・24】

23 会社―小社

1、銀行―弊行

2、学校―本校

3、貴宅―拙宅

4、佳作―粗品

24 正常―異常

1、自国―祖国

2、干涉―放任

3、合成―画一

4、架空―現実